

月華後宮伝7 ～虎猫姫は冷徹皇帝と望月を仰ぐ～

織部ソマリ Somari Oribe



アルファポリス文庫

目次

序章	虎猫姫は画策する	5
第一章	虎猫姫はその目で確かめる	18
第二章	虎猫姫と二人の月妃	60
第三章	虎猫姫は月を満たす	108
第四章		167
終章		230

序章

春の月桃祭げとうさいを終えた御花園ぎょかえんの桃は、すっかり新緑に変わり、小さな実が膨らみ始める季節となった。

そして、移り変わる季節と共に、月華宮げつかきゆうも変わりつつあった。

——紫曄しゆうは筆を持つ手を止め、フウと息を吐く。

卓上には裁可待さいかちの書類が山と積まれ、室内には墨の香りが充満していた。

「なかなか終わりが見えないな」

霞む目元を指で押さえて呟く。

声には疲れが滲んでいるが、以前のような苦悩の響きは薄い。

「少し休憩するか」

紫曄は立ち上がり窓を開けた。

ふわりと吹き込む初夏の香り。青々とした爽やかな風が、室内に立ち込めた墨の香りを吹き飛ばした。

この月華宮は、こんなに明るかったのだろうか。

紫曄は見慣れた景色に思う。

黒い屋根瓦で統一された月華宮。見上げていた幼い頃から、垂れ込める雲のようでも重苦しく感じていた。

迷宮のようなこの場所で、細い月明かりだけを頼りに生きていくのかと、うんざりしたこともあった。

だが、今はどうだろう。

あんなに重苦しく見えた黒瓦は、陽光を反射し白銀に輝いている。

行き交う官吏たちの足取りは軽く、女官たちの顔は明ら。門に立つ衛士たちも、どこか誇らしげに見える。

「異例の帰郷をした『神託の妃』を、皇帝が月華宮に連れ帰り、無事に月桃祭を終えた」

言葉にすればそれだけのことだが、このことが、月華宮に大きな変化をもたらしたのだ。

月魄国において月は特別なもの。年に何度かある祭祀のうち、月桃祭は月の女神に捧げるものであり、夫婦を象徴するものでもある。

春の満月の夜。月の女神の神話になぞらえ、皇帝と皇后——もしくはそれに等しい

月妃が、揃って祈りを捧げる。

皇后・望月妃が空位である場合、その役目を果たすのは寵姫か、最上位の月妃だ。そして役目選ばれた妃が、皇后・望月妃に内定するのだ。

月桃祭の前。月華宮には、皇后候補が三人いた。

一人目は、最上位の月妃であり、宦官の長を祖父に持つ、弦月妃・董白春。

昨年の星祭において、凜花が行う奉納を妨害し、祭祀を台無しにした咎で長く謹慎中だったが、月桃祭には参加するとされていた。

二人目は、月妃の位としては最下位だが、『神託の妃』であり、紫曄の寵姫である朔月妃・虞凜花。神月殿の要請により、古の儀式を調査するとの口実で、『虎化しない薬』を求め、故郷の雲蚩州へ帰郷中だった。

三人目は、正確には妃ではないが、後宮に滞在しており月妃同様とされていた、琥国の王女・琥月夜。彼女は凜花と同じく虎——金虎に変化する。

王女が月華宮に入り込んだ目的は、白虎の子を得ること。実は月魄国の皇家と、雲蚩州の虞家は、人虎である琥国の王家から分かれた一族だったのだ。

王女の狙いは紫曄。積極的に皇后になる気はないが種は欲しい。そんなところだ。

後宮にはあと二人の月妃——元高位月官で、紫曄やその側近、双嵐の幼馴染みである暁月妃・赫朱歌。武の名門の娘だが、柔らかな気質の薄月妃・陸霜珠もいるが、月

桃祭で皇帝と祭祀に臨むのは、寵姫か最上位の月妃だ。

寵姫ならば朔月妃・虞凜花。

最上位の月妃なら弦月妃・董白春。

月妃ではないが、身分が一番高い者なら琥国の王女・琥月夜。

三人のうち誰が皇帝と共に月桃祭に臨むのか。そして、皇后は誰か。

今回の月桃祭は、そんな意味も併せ持つ重要なものだった。

もちろん紫曄は、凜花を望んでいた。

しかし凜花は雲蚩州に帰郷中。

王女に飲まされた特別な銀桂花酒——人虎の能力を一時的に高める『虎の秘酒』に

『長く変化していられる薬』を混ぜたもの——によって、以前にもまして制御が難しくなった虎化を制御し、その上で、月桃祭までに戻れるかは賭けだった。

だが、妨害があつたり、虎化の制御がまだ不完全だったり、少しの問題はあつたが、紫曄と凜花は賭けに勝った。

そして月桃祭の夜。紫曄は凜花を皇后・望月妃にすると宣言したのだ。

大弓を使った古の儀式。二人だけに降り注いだ桃の花卉。どちらも神秘的で、月の女神の祝福が『神託の妃』にあると、そう感じさせた。

「神託の妃、か……」

月桃祭の夜を思い出し、紫曄は呟く。

一年前、洪々迎えた月妃だった。

それが今、こんなにも大切な存在になるとは、想像もしていなかった。

『白銀の虎が膝から下りる時、月が満ちる』

『下りる』という文言は不吉だ。いや、月が満ちるは吉兆だ。

そんな声が上がった神託の解釈は、今も定まっていない。

それでも——

「不吉なものか。吉兆どころか、祝福としか思えない」

少なくとも紫曄個人にとって、この神託も、神託の妃である凜花も、初めて手に入れた女神の祝福だ。

ふわりと風が吹き、新緑の香りが鼻をくすぐる。

爽やかな風が吹き抜けるのは、紫曄がいるこの高樓に繋がる大路。そして、さらに

その先にあるのは、皇都・天満の街。

なぜか今日は、聞こえるはずがない民の声まで聞こえるようだ。

凜花を追いかけ、雲蚩州へと駆けた冬。

活気に溢れる天満の街を抜け、いくつかの土地を訪れた。

残念ながら、どの土地も天満のようだとは言えなかった。豊かな街もあれば、そう

ではない街もあり、穏やかな土地もあれば、問題のある土地もあった。いいや、榮えている皇都・天満にも、光と影があるのだろう。自らの目で見てきたからこそ、紫曄はそう思う。

皇帝らしく月華宮にこもっていたなら、決して知ることはない現実だ。

特に面白く、衝撃を受けたのは凜花の故郷、雲蚩州だ。

州侯しゅうこうの娘である凜花が、民と畑に入り仕事をする。対等な目線で意見を交わし、共に茶を飲む。

これが少々型破りな虎猫の姫、凜花を育んだ土地か……と紫曄は思った。

凜花は雲蚩州の跡継ぎらしく、俯瞰ふかんして冷静に観察する目を持ちながら、土にまみれて働く民の視線も持っている。それは、この地だからこそ得られたものだと思惑した。

ほんの少しだが、紫曄も畑で民と言葉を交わしたのだ。

これまで紫曄は、広い視野で、国と民を見ているつもりだった。その視点を知っているつもりだった。

しかし、いざ民と並んで畑に入ってみれば、見える景色は全く違っていた。

「本当につもりだったな」

紫曄は苦笑で呟く。

紫曄にとって、ほんやりとした概念でしかなかった『民』というもの。彼らは、顔も声も、年齢や性別、家族構成に仕事、性格、住んでいる土地、何もかもが違う、それぞれ一人の人間だ。『民』なんて生き物はいない。

そんな当たり前のことに気付かされた。

「——だが、ここからでなければ見えない景色もある」

紫曄は高樓から身を乗り出して、街を行き交う、豆粒よりも小さな人々を見つめる。高い所から見えるのは、せいぜい人々の頭くらいで、その顔も、表情も、語る言葉も聞こえない。

だから皇帝は、官吏かんりを通じて民の声を聞くのだ。雲蚩州で土にまみれ、民と肩を並べ言葉を交わした今の紫曄なら、きつとその声を正しく聞けるはず。

来年の春、雲蚩州の畑からは『満葉草』まんえくそう収穫の報が届くだろう。

満葉草を発見したのは、凜花と小花園しょうかえんの女官だ。

満葉草は、後宮の小花園、神月殿と雲蚩州の隠し庭、皇都一の妓樓ぎろう、三青樓さんせいろうの四箇所でひっそりと栽培されていた。元を辿ればそれらは、人虎によって虢国から持ち込まれた、人虎のための葉草だったようだ。

満葉草には、他の葉草が持つ効能を高める力がある。使いようによっては、不治の病も治るようになるかもしれない。そんな夢のような葉草だ。

「凜花の計画が上手くいけば、この国の医療は大きく変わる」

凜花が立案した、満葉草を中心に据えた『後宮医局』の計画は進んでいる。

併設する研究機関で薬を生み出し、後宮医局で作成、管理をする。また、後宮の妃から最下位の宮女まで、気軽に医薬師に相談できる場所を目指す。

凜花には、満葉草を秘匿・独占して財を成し、皇后の権力として使う道もあった。

しかし彼女が選んだのは、広く公開し、誰もが使えるようにする道だった。

それは『薬草姫』と呼ばれた凜花の、薬師としての矜持だ。

良い薬を作り、分け隔てなく必要な者に届ける。凜花はずっと、そうしてきたのだ。「これで誰もが、凜花が望月妃になることを認めるだろう」

というか、だめ押しだ。

昨年之星祭。先日の月桃祭。その両方で、凜花は神秘的な姿を見せた。神託の妃には月の女神の祝福がある。皆がそう思い、凜花こそが望月妃に相応しいと思った。

その上で、損得抜きで満葉草の存在を公開すれば、人間性も器も十分だと、皇后に望まれるだろう。

凜花は『満葉草』『後宮医局』の成果を自身の価値として、神託も、紫曄の寵愛も関係なく皇后になるのだ。

(下手をすれば、皇帝の存在を食うほどの存在感だな)

紫曄はそう思い、クスリと笑う。

「では、俺は皇帝として何をするべきか」

頼もしい妃だが、皇后に寄りかかるばかりの皇帝ではない。

そのためにまず手をつけたいのが……

紫曄はくると振り返り、窓を背にして卓上に積まれた書類を見つめる。月妃候補の推薦書の山だ。

「ここに来て、またとはなあ……」

はあ、と思わず溜息が漏れた。

宦官長が失脚した影響は、紫曄にとつて好ましいものばかりではなかった。後宮において大きな力を持つ者がいなくなったことで、月妃の推薦合戦が再燃してしまったのだ。

皇后・望月妃が内定したことも大きい。次の寵姫を輩出するのだ！ と、連日あちこちから月妃の推薦書が届いている。

これは紫曄の父、先代皇帝の在り様の影響もある。先代は、その時の寵姫を皇后に据えた。寵愛が移れば、皇后の座も移る。そして寵愛を受ける月妃には子がつきものだ。紫曄以外の男児がいたこともある。紫曄は太子でありながら、東宮から出されたこともあった。

月魄国で、皇帝は月を象徴とする。

月とは丸く、欠けてはならないもの。皇帝は完璧を求められるのだ。

月の満ち欠けに応じた名を持つ、月妃については最もうるさい。九人の月妃と皇帝、全てが揃って完璧な月が完成する。それによって皇帝は、月の女神の加護を得られるのだと言う者も多い。

だが、紫暉は凜花以外の妃は必要ない。

形だけの妃など、互いに不幸を招くだけ。父親の後宮と、その様を見てきた紫暉は実感を持ってそう思う。皇帝も月妃も揃っていたが、満ちていたとは言いがたい。

「あの父のどこに加護があったというのか……」

とはいえ、かつての紫暉は押しに負け、結局、最低限の月妃を後宮に迎えた。

当時はまだ凜花に出会う前だったし、月妃を迎えろと言う者たちが大人しくなり、皇帝の責務に集中できるならそれでいいと思った。

選んだのは名家の娘。少々人数が控えめでも、表立って文句は言い難く、面倒の少ない者たちだった。そのうちの一人、眉月妃は狙い通りすぐに後宮を去った。

暁月妃の朱歌は、婚姻に価値を持たぬ月官で、薄月妃の霜珠は、周囲が強引に後宮入りをさせた気弱な娘。面倒なのは宦官長を祖父に持つ弦月妃と、『神託の妃』である朔月妃——どんな娘かさえも分からなかった凜花だが、当時は流れに任せ、どちら

かを皇后にすればいいと軽く考えていた。紫暉は月妃を迎えても、寵姫を作る気も、後宮での務めを果たす気すらなかった。自身の幼少期を思えば、不幸な子を何人も作る気になれなかったからだ。

紫暉にとって後宮と月妃は、望まぬ厄介事でしかなかった。

皇帝として無責任かもしれないが、後継者は双嵐の子を養子に取ればいいと思ってた。なんせあの二人は、紫暉の代わりに皇帝の座に就いてもおかしくない血筋だ。

「はあ」

紫暉はうんざりした顔で、風にそよぐ髪をかき上げる。

紫暉が心から望んだ皇后は、『神託の妃』凜花だ。凜花との子なら欲しい。彼女は自身に流れる血を気にしているが、もしも人虎の子が生まれたなら、それはそれであるとかなる。

凜花は今、なぜか虎の耳と尻尾が出てしまう症状を抱えているが、『虎化しない薬』や、虎化を抑える『解毒の茶』もある。琥国の王女の協力だつて得られている今、虎化は大した問題ではない。

「これ以上ない、文句の付けようのない皇后だというのに……鬱陶しい」

紫暉が凜花しか望んでいないことはわかっているだろうに、月妃の推薦書を持って来た者たちの言い分はこうだ。

『神託の妃を迎え、その神託通りに月が満たされるには、皇帝と皇后だけでなく、その他の妃も正しく埋める必要がございましょう』

神託は絶対には逃せない。確実に成就させるため、九人の月妃を全て揃え、完璧な後宮を作るべきだと言うのだ。

「……そんなお綺麗な理屈だけではないだろうがな」

家門から月妃を出すことは、すでに権力闘争の一部だ。紫暉がどの娘を妃に選ぶかそれによって情勢は変わる。紫暉は積み上がった推薦書を、トントんと指で叩く。

まったく煩わしい。やっと穏やかに眠れる場所を得たというのに、結局、皇帝という立場は生臭い。

宦官長・董の罷免に伴い、その一派も罷免した。一番多かったのは宦官。次に官吏、女官、宮人や宮女もクビにした。ただ放逐されただけの者、処された者と処遇は様々。もちろん最終決定を下したのは、皇帝である紫暉だ。

一気に罷免すれば、その後どうなるか。そこまで考えてのことではあるが、やはり月華宮は混乱している。

歯抜けの櫛のように、あちこちで人員が抜け、人手が足りていないのが現状だ。仕事は滞りがちになり、皆、混乱しつつなんとか日々をこなしている。

残った人材を振り分け、開いた穴を埋める。それが一番手っ取り早い対応だろう。

新規登用は後回しだ。

だが……と、紫暉は一瞬思考を止め、心の中を覗き込む。

——ずっと、やりたいと考えていたことがある。

今がそれをやる時、第二の改革の時なのではないか？ と、紫暉の心が呟く。

「だが、本当にやっていいのか」

紫暉は眉を寄せ、険しい表情でトントんと指で音を刻む。

本当に、ただ抜けた穴を埋めて同じ機構を守るのか。

紙が足りなくなった時のように、糊で新しい紙を継ぎ、何事もなかったかのように継続させることを選ぶのか？

制御しきれなかった宦官の頭をすげ替え、再び彼らが自由に動ける場——美しいが、毒を含む後宮を作らせるのか。

トント。

紫暉は指を止め、ふーっと息を吐く。そして頷き呟いた。

「いや、やるなら今しかない」

数日後。

朝議の場で、紫暉は「宦官を廃す」と言った。

第一章 虎猫姫は画策する

朔月宮の庭は、緑鮮やかな薬草が盛りを迎えていた。

「よく茂ったわね」

髪を一つにくくり、作業着を着た凜花は汗を拭つつ笑う。

足下には抜いた雑草と、増えすぎて間引いた薬草が山になっている。

この庭は、凜花が帰郷している間に、明明^{めいめい}たち小花園の者が整えてくれたものだ。小花園で育つ薬草の中から、目で楽しめるものが選ばれた。敢えて花を咲かせたものも多い。白や青の花ばかりなのは、朔月妃の色である、白藍色^{しろあいいろ}を意識したようだ。

だが、花の時期にも終わりが来た。今日は夏に向けての植え替え作業をする。

「凜花さま！ 苗をお持ちしました！」

「ありがとう、麗麗^{れいれい}」

振り向くと麗麗は、薬草満載の大きな籠を片手で担いでいた。相変わらずの力自慢で、ほればれしてしまう。

「どれも元気な苗ね。これなら上手く根付いてくれそう」

「新しく植える苗も、花が咲くのですか？」

「もちろん。植物は花が咲き、雄しべと雌しべが花粉の受け渡しをして、実や種を作るのよ。でも観賞用の花でなければ、華やかでないものも多いの。これはあまり目立たない感じかな？」

花を愛でるためのもの、実を食べるためのもの、それぞれ目的に合わせ、人の手で作られた植物は多くある。だが小花園の薬草は、薬効を目的としているので、総じて花は目立たないものが多いのだ。

「なるほど。言われてみれば花が咲くのが当然ですね」

薬草は花が咲く前に収穫するものが多い。麗麗が勘違いするものもわかる。

「今年は小花園にあまり行けそうにないから、庭の世話が唯一の楽しみね」

凜花はそう言い、愛おしげに苗に手を伸ばす。

明明が用意した苗は、すぐに植え替えられる状態だ。さすがは小花園を任せられた小花園長。細やかな気遣いが明々らしい。

「さあ、麗麗。さくさく植えていきましょう！」

「はい！ あつ、毛玉はあちらで遊んでいなさい！ 今は駄目だ」

麗麗の足下で「くう？」と鳴く毛玉とは、彼女が可愛がっている土撥鼠^{マーモット}だ。最近は何つきが随分丸くなってきて、本当に毛玉にしか見えない。

「あはは、毛玉も手伝ってくれるの?」

「まったく……毛玉! 仕事を終えるまで私の肩に乗っていなさい!」

「きゅん!」

毛玉は凜々しい顔で一つ鳴き、麗麗の肩にしゅたりと乗った。後宮で暮らすのなら……と、調教していた麗麗の成果が出てきたようだ。

毛玉を供に、凜花と麗麗が作業に勤しむと、植え替え作業はそれ程からず終了した。

「夏の庭を作るなら、天星花を植えてみたいとも思っただけど……」

夏に盛りを迎える薬草へと生まれ変わった庭は、青々として美しいが、見た目が平坦で少々退屈だ。

藤のように房状の花を付ける天星花で、生け垣や棚を作れば華やかになると思う。

「天星花ですか。確かに夏にも、月妃にも相応しい花ですが、凜花さまはじき朔月宮をお出になります。植えるのなら、望月宮に移ってからにいたしましょう」

「そうね」

夏の天星花は、秋の銀桂花と並び月妃を象徴する花だ。夏の祭祀、星祭で用いる花で、星のような形の白い小花が連なり房を作る。

凜花は改まった庭をぐるりと見渡した。

一年前、朔月妃になり、この宮に入った時は殺風景で荒れた庭だった。今はすっかり凜花好みの庭になったが、自身で手を入れただけに思い入れも深く、ここを去るのは少し寂しい。

この庭では、紫曄ともよく食事やお茶を楽しんだ。紫曄だけではない。黄老師や兎杜^と、双嵐を招いたり、月妃仲間の朱歌や霜珠を招いたりもした。それに片隅にある簡易竈は、まだここへ来たばかりの頃、麗麗と作った思い出深いものだ。

(あの時、キリッとした顔で竈を組んでくれたけど、今思うと麗麗のあの顔は、困惑を隠していたのでしょうかね)

生真面目な麗麗らしい。凜花は思い出して苦笑を零す。

紫曄もやけに竈を見ていたし、好きに手を入れろと言ってくれた庭も、まさか薬草畑を作るとは思っていなかったようだった。

一年前の凜花は、後宮に入っても雲蜜州の『薬草姫』のままだった。皇都から遠く離れた地で育ち、後宮も、妃らしい振る舞いもよく知らなかった。忘れていた神託により、突然召し上げられたこともあり、準備期間がほとんどなかったのだ。

「私ったら、随分と非常識なことをしてたのねえ」

そして思う。妃として対立する間柄ではあったが、伝統を守り、教養深くもあった弦月妃。型破りだとは思いますが、宮廷で育った琥国の王女月夜。

二人の住まう宮や、立ち居振る舞いを見ると、雲雀州で自由に育った己には、上位者として積み重ねた研鑽も、貫禄も、まだまだ足りないのだと思ひ知らされる。

「多少の非常識さはあっても、下々の者にも温かく接し、自由な発想で行動するのが、凜花さまの素晴らしいところだと思います。後宮に上がるような姫君の、他の誰も持っていない凜花さまだけの魅力です。主上もそういうところをお氣に召したのでしよう。……私もですが」

麗麗が少し照れくさそうに笑う。

「ふふ。ありがとう、麗麗」

「この庭を、主上にも早くお見せしたいですね」

「そうね……でも、しばらく昼間の訪問は難しそうね」

「凜花さま」

麗麗が凜花の手をぎゅっと握る。

「私が兎杜を通じて、おいでくださるよう訴えて参りましょうか。二つ先の満月は、もう星祭です。この庭で過ごせるのもそれまで……」

「いいのよ、麗麗。主上もお忙しいでしょう」

凜花は苦笑して、麗麗を労うように、その手をばんばんと叩く。麗麗はキュッと眉を寄せ、しかし……と呟き俯く。

すると毛玉が麗麗の腕を伝い、肩からトトと下りてきて、二人の手にその小さな手を重ねた。

「ぶきゅ？」

どうやら二人の真似をしたようだ。遊んでいると思つたのかもしれない。

凜花と麗麗は顔を見合わせ、ぶはつと吹き出した。

星祭を控え、紫暉だけでなく凜花も忙しく、なかなか会えぬ日が続き、不満や疲れが溜まっていたようだ。だが、毛玉の可愛らしさで一氣に癒やされた。

「ふふ！ ありがとう。毛玉」

「きゅ？」

麗麗に抱かれた毛玉は、こてんと首を傾げる。再び可愛さで癒されてしまう。

「ねえ、麗麗。宮女たちの休憩場所に、毛玉を連れて行ってあげられない？ 皆、目を輝かせながら、毛玉を遠巻きに見ているでしょう？」

「そうですね。毛玉も遊んでもらえれば喜びますし、女官長と相談します。小花園にも散歩がてら連れて行きましょうか。凜花さまもご一緒に」

「ええ。皆も忙しそうでちょっと心配なのよね……いらいぐらゐ句袋でも作って差し入れようかな」

凜花が誰の手も借りずに作れるのは、薬草を使ったものくらいだ。よく働く皆を労

うために菓子でも差し入れたいが、人数の減った厨房に負担をかけたくない。

——月桃祭の後、月華宮では一氣に人が減った。

最も顕著だったのは後宮だ。多くの宦官が後宮を追われた。

後宮で長年権力を握っていた、弦月妃の祖父である董宦官長が罷免されたからだ。

宦官長の派閥には、当然のように宦官が多く、しかも役職付の者が多かった。

そのせいで後宮は今、混乱中なのだ。

上役がいなくなり命令系統が乱れ、来ない命令を待ち仕事を怠ける者、指示を取りにあちこち駆けずり回る者、いつもの仕事だけをする者。向き合い方は様々だが、手が足りていないのは明白だ。

さらに、日陰へ追いやられていた、反宦官長だった者たちが調子づき、勝手に役職を名乗り始めた。これは明確な違反行為だ。

宦官の質はここまで低下していたのかと、昔を知る黄老師は嘆き、呆れ、目に余る者には懲罰を与えた。せっかくの好機に彼らは自滅したのだ。ここで評価を上げておけば、紫曄の言葉は変わっていたかもしれないのに。

先日、紫曄が「宦官を廃す」と宣言した。

今、後宮に残っている宦官たちは反宦官長派だ。多くは権力に興味がなく、宦官の職務に誇りも、責任感も持っていない。

だが、元宦官が後宮の外で生きていくのは容易ではない。

早々に外部へ連絡を取り、後宮を出た後の道を模索する者もいれば、凜花に相談したいと、朔月宮の宦官を頼ってきた者もいたそうだ。

宦官の職務そっちのけの混乱ぶりは、女官や宮女の負担を増やしている。

「どうにかしてあげたいけど、私が勝手に采配するわけにはいかないし……」

「ええ。それはご遠慮ください、凜花さま。後宮には細かな規則や、階級により立ち入れる場所、仕事、使う道具など、規則が多いのです。特に月妃さまの宮は、位によって違うことも多いそうで……長く務めている者でなければ、采配は難しいと思います」

「そうなのね。宮ごとに規則が変わるのは大変でしょうね……」

星祭の夜に行われる立后の儀が終われば、凜花は望月宮に移動する。

望月妃は月妃の最高位。後宮の隅にある朔月宮とは別世界なのではないか？ 凜花

自身も規則を予習する必要があるそうだ。

「空いてる宮の管理も大変そうよねえ」

現在、使われている宮は四つ。不使用の宮は五つだ。凜花が後宮入りした一年前とは、使用中と不使用の数が逆転してしまった。

たった五人しかいなかった月妃は、さらにその数を減らし、今は朔月妃の凜花、暁

月妃の朱歌、薄月妃の霜珠、三人だけ。存在感のあった弦月妃と、派手だった眉月妃は後宮を去ってしまった。

「月夜殿下が琥国に戻られれば、佳月宮も空いちやうわね……」

「王女殿下は星祭には出席されるのでしょうか？」

麗麗は毛玉を撫でながら、少し緊張した表情で聞いた。

「うん……月夜殿下の都合次第だと思う」

「都合ですか」

凜花は頷くと、周囲に人がいないか耳を使って確認し、口を開いた。

「月夜殿下は、琥国を変える女王になるおつもりよ。将来的にはなく、おそらく近いうちに事が起こるわ。殿下が帰国する時は、全ての準備が調った時でしょうね」

「準備ですか……琥珀殿が暗躍していそうですね。それにしても他国の後宮で玉座奪取の仕込みとは、あの方らしい。王女殿下がやるとおっしゃったなら、必ずやり遂げるのですね……」

麗麗はゾツとした顔を見せ、腕の中の毛玉を抱きしめる。

「ふふ！ 麗麗にも怖いものがあるのね。侍女仕事ができ、武芸にも秀でているのに」

「侍女仕事は、凜花さまに仕えるため精進しましたから。ですが武芸のほうは……王

女殿下に琥珀、それから雪嵐さまと晴嵐さまには勝てる気がしません」

「ああ……まあ、そうですね」

金虎になる王女。それより一回り大きな黒虎に変わる琥珀。そして双嵐は、どうにも底が知れない。冷静沈着な気質で文官を選んだ雪嵐も、本来は武官寄りなのだと、雲蚩州からの帰路で思いついた。

（雪嵐さまだけは敵に回したくないわね）

帰還を妨害した襲撃犯の、血塗れの顔拓を何食わぬ顔で取ったと聞き、凜花はそう思った。

麗麗も平然とその話をしていたが、麗麗と雪嵐では怖さの種類が違う。

おそらく麗麗は、深く考えず『できるからやる』というだけ。雪嵐は、実利と効率を計算した上で有益と判断したなら、なんでもできる人物だ。

「頼もしいかぎりね」

紫暉の側にそういう人物がいるのは心強い。紫暉が情に流されてしまいそうな時でも、無理やりにでも背中を押して、皇帝として立たせてくれるだろう。

——皇帝とは孤独なものだ。その後ろには数多の臣が続くが、前には誰もいない。（ならば私は、紫暉がどんな時にあってもその隣に立ち続けよう。たった一人だとしても、誰かが隣にいてくれることは救いになるもの）

凜花は心の中で密かに誓う。

なぜなら凜花は、誰かが隣にいてくれることが、どれほど心強いかを知っているからだ。入ったばかりの後宮の片隅で、畑仕事に付き合ってくれる侍女の存在が、それほど嬉しく心強かったか……

凜花は賑やかになった庭で、共に汗を拭う麗麗に微笑んだ。



「凜花さま。準備ができました。そろそろお衣装の打ち合わせに参りましょう」

「わかったわ。麗麗、後でこれを黄老師に、こちらは明明に渡してくれる？」

凜花は書き上げたばかりの書類を手渡すと、小さく伸びをしてから自室を出た。

星祭と立後の儀、両方の支度は徐々に忙しくなってきた。加えて後宮医局の準備も進めなければならない。

これらは凜花が胸を張って、皇后・望月妃になるための最後の関門だ。逆に言えば見せ場でもある。

「凜花さま、お疲れではありませんか？」

ひとけのない通路で麗麗が、そっと訊ねた。

「大丈夫よ。皆が協力してくれているし、将来のためなもの。できるだけ見栄え良く、立派な成果をひっさげて望月妃になったほうが、私と主上のためになるでしょう？」

凜花は疲れの滲む目元で微笑む。

「でも、これはちよつと……申し訳ないわね」

麗麗が手にした桐箱きりばこに視線を落とし、凜花は眉尻を下げた。

その桐箱は、雲蚩州から届いたばかりの荷物だ。中身は新作の輝青絹きせいぬいの布と、輝青絹で作った糸。

輝青絹は月光を浴びると色を変える。ということは、それを縫う糸も同じ輝青絹でなければならぬ。だが縫い糸が不足してしまい、雲蚩州から急ぎ糸を送ってもらったのだ。

「糸だけでなく、新作の輝青絹まで送ってくるなんて……予想外よ」

月桃祭で着た衣装の布は、桃の花弁が浮かび上がる仕掛けだった。同封されていた叔母からの文ふみを読むと、今回は天星花の星型が浮かび上がる意匠だという。

無事、凜花が望月妃に内定したのを見届けて、急ぎ雲蚩州に戻り、星祭に相応しい布を仕立ててくれたそうだ。

「叔母様は、望月妃という立場になるのなら、演出も必要だって理解しているのよねえ。本当にありがたいし、やるべきだけ……気が重いわ」

「凜花さま。輝青絹は凜花さまの代名詞のようになっていきますし、皆が新作を楽しみにしているのも事実です。望月妃のお披露目にもなる星祭で、期待を裏切るのは上策ではありません。ですので……うーん、どうにかこうにか、裁縫師たちには頑張ってもらいましょう！」

麗麗がグッと拳を握って言う。麗麗としては激励の気持ちなのだろうが、裁縫師たちの前でこれをやったら、脅しになってしまいそうだ。拳は控えて、激励だけしてもらおう。

「そうね。それしかないわよねえ」

はあと凜花の口から溜息が出た。

裁縫師たちに無理を強いるのが心苦しい。

だが麗麗の言う通り、今回の星祭は、臣民に向けた望月妃・凜花のお披露目でもあるのだ。

月華宮の広場を開放する星祭には、多くの民が集まる。

そこで期待されるのは、昨年の星祭以上のものだ。

昨年は、寵姫と輝青絹のお披露目だった。凜花が歌った古の祝い歌と、月光で輝く輝青絹。それは神託の妃を信じさせるには十分で、皇帝の人気と、望月妃への期待に繋がった。

そして今回。衣装担当の裁縫師たちは、凜花が必ず帰還し望月妃になると信じていた。しかし帰還を待って衣装を作るのでは間に合わない。祭祀は季節ごとにあり、立后に際した衣装も必要になる。

そこで彼女たちは、月桃祭と星祭、二種類の衣装を先行して縫っていたのだ。

「何があっても凜花さまが衣装に困らないよう、気を回してくれたのが裏目に出てしまったのですね」

「月桃祭の衣装も、新作の輝青絹を使って仕立て直しをしてもらったのよ？ それなのに、さらに手が込んでいるだろう星祭の衣装まで……」

やっぱり、心苦しいなんてものではない。

「仕立て直しをどうお願いしよう……」

そう悩みに悩む凜花であったが、解決策は意外なところから出た。

「——凜花姉さま。刺繍はいかがですか！」

裁縫師たちのもとへ行くと、なぜかそこに瑠花^{るか}がいた。しかも桐箱を開け、申し訳ない気持ちで事情を話していた凜花に、目を輝かせそんなことを言ったのだ。

瑠花は輝青絹を作った叔母の娘——凜花のいとこだ。少し年の差があり、周囲からは妹のように見えるそうだ。

だが、瑠花が凜花の妹のようだと言われるには、もう一つ理由がある。

好きなものに夢中になり、のめり込むところがそっくりらしい。凜花は葉草に、瑠花は家業でもある布や染め物に夢中だ。

「刺繍？　どういうこと？　瑠花」

「お衣装を一から仕立て直すには無理があると思うの。だから新作の布は、既存の衣装に少し組み込む感じにして、輝青絹の糸で天星花の刺繍を入れたら、統一感も出て素敵だなんて……！」

「確かに刺繍は素敵だと思うけど、瑠花、これは縫い糸よ？」

凜花は桐箱の中の糸を指さす。

「そこは心配ないわ。刺繍糸は私が母に送ってもらいました！　もちろん輝青絹の糸よ」

さすが瑠花だ。星祭まで滞在を決めたそうで、布が織れないなら刺繍をしたい！と大量に送ってもらったとか。

『余分な糸は、裁縫師や、知り合った女官に差し上げるように！』

叔母からは、そんな一言が添えられていたらしい。

せっかくの機会だ、輝青絹の宣伝をしてきなさい！　と叔母は伝えたつもりだろうが、瑠花には伝わっていなかったようだ。

なぜなら瑠花は「心苦しいのですが、刺繍糸に余分なんて出るわけありません」と

言っていた。

「でも、本当に糸を提供してもらっていいの？　瑠花」

「はい！　糸は使ってこそですもの！」

後宮の裁縫師による刺繍が見たいのだ！　と輝く瞳の圧が強い。

「裁縫師長、瑠花の提案はどう？　仕立て直しと刺繍……負担が少ないのはどちらかしら」

「とても良い提案かと存じます。刺繍を加える直しをいたします。それと……朔月妃さま。どうか負担などとおっしゃらないでくださいませ。わたくしどもは、あなた様の裁縫師です。朔月宮で腕を振るえる幸運に感謝しております。月が満ち、望月となった後も、針を献上できますことを願っております」

裁縫師長は膝を突き、頭を深々と下げて言った。他の裁縫師たちもだ。

「みんな……」

そうだ。彼女たちは後宮で雇われているが、あくまでも朔月宮の裁縫師。朔月妃がいなくなれば、ここは解散となる。

もしかしたら彼女たちが凜花の衣装を縫うのは、これが最後かもしれないのだ。

凜花は裁縫師長に歩み寄ると、同じように膝を突いた。

麗麗に止められるだろうか。凜花はそう思い、チラリと麗麗を窺ったが、彼女は嬉

しように目を細め頷いている。やはり麗麗は、凜花のよき理解者だ。そして凜花は、微笑み裁縫師長の手を握った。

「一年間世話になりました。あなた方が縫ってくれた衣装は、私に力を貸してくれました。ありがとうございます。星祭の衣装も楽しみにしているわ」

「はい。ご期待に添えるものを」

裁縫師長はおそろおそろ顔を上げ、そう言い微笑みを返した。

「——では、皆さま作業を開始してください！」

パン！と麗麗が手を叩き、場の空気をがらりと変えた。

「申し訳ないが、時間があまりないので。皆の力が頼りです！ 凜花さまを美しく彩る衣装を頼みます！」

「はい！」

「お任せください！」

麗麗の鼓舞に、裁縫師たちは腕を突き上げ、「おおー！」と応えた。

衣装の寸法を確認し終えると、凜花は見学中の瑠花を手招きで呼んだ。

「瑠花。ここはしばらく戦場になるから、立ち入りは控えてあげてね」

「はい。心得ます！」

「どう？ 市場調査と勉強は順調？」

瑠花が皇都に留まっているのは、本人の希望だけではない。叔母の意向だ。

雲蚩州から皇都は遠い。

この機会に、瑠花に最大限の経験を積ませるつもりなのなのだ。

「市場調査はまあまあ順調かなあ？ 勉強はとっても順調です！ 今日この後、神月殿で伝統の染め物を見せていただく予定です」

「え、神月殿にも出入りしているの？ あの、大丈夫？ 碧^{へき}っていう月官薬師につきまとわれたり、妙なことをされたりしていない？」

「碧さまですか？ 特には……でも、琥珀さまにも同じ事を言われました。琥珀さまは随分心配してくださって、神月殿ではずっとついてくださっているんです。あ、そうだ。凜花姉さま、許可を頂きたいんですが……」

瑠花は急に小声になり、凜花に耳打ちをする。

「あの、琥珀さまのもう一つの職場……三青楼に連れて行ってもらってもよいでしょうか」

「えっ。瑠花、あなた三青楼がどんな場所か知っているの!？」

「はい。皇都一の妓楼ですよ！ 美しく芸事に秀でた女性がたくさんいると……！それで私、妓女の皆さんの衣装を拝見したくて！ だって、皇都一つとは国一番

の妓楼でしょう？ 最高のものが集まっているはずですよ。輝青絹はどの程度広まっているか、評判も確認したいし……あと、外国の布もきつと見られるし！」

すごい勢いだ。だが瑠花は、妓楼という場所をよくわかっていないようだ。

瑠花に「凛花の許可を取れ」と言ったのは、おそらく琥珀だろう。まだ若い……というか、まだ少女の瑠花にとって、あの場所は様々な意味で刺激が強い。

しかし布馬鹿な瑠花のことだ。どんな場所でも、素晴らしいものが見られるのなら気にしないし、布以外は目に入らないと思うので……いや、それともうかと思うが、琥珀の心配は杞憂に終わるだろう。

「……琥珀殿が案内してくれるのよね？」

「はい！ 数人、妓女の方を紹介してくれるそうです。勝手に歩き回らないように、絶対に側を離れないようにと厳しく言われました。もちろん言い付けは守ります！」

凛花は麗麗と顔を見合わせた。興奮した瑠花はいつの間にか耳打ちではなく、普通に話していたので麗麗にも聞こえていたのだ。

「琥珀殿は、随分と面倒見がいいですね」

「ふふ、そうね。琥珀殿は月夜殿下のお兄さまだから……きつと放っておけないのよ」

碧の面倒もよく見ていたし、振り回されるのが苦ではない性格なのかもしれない。

「あの、凛花姉さま……」

「わかった。許可します。でも、琥珀殿の言うことをよく聞いてね。夜の街は華やかだけど、危険もあるの。わかった？」

「はい！ それでは私は私は神月殿へ行つてまいります！」

瑠花は満面の笑みでそう言い、新しく手に入れた布見本を抱えて帰っていった。

「さて。私たちも戻りましょうか」

「はい。この後は書庫ですか？」

「ええ。少し調べ物と、考えをまとめたいの」

凛花は歩きながら麗麗と話す。朔月宮は人が少ないので、月妃がお喋りしながら歩いても、見咎められなくて気軽でいい。

「後宮医局の運営計画書ですか？ このところずっと練ってらっしゃいますね」

「何通りか考えておきたいの」

——新しい畑はやってみなければわからない。雲蜚州で新しい薬草の栽培を始めた時に、いつも思い知らされてきたことだ。

できる限りの下調べをして、その薬草に適した土を作り、世話は事前にまとめた手引書に沿ってやる。しかし薬草栽培の経験がある者であっても、なぜかうまく栽培できなかったり、想定外の問題が起こったりする。

「どんなに練つても抜けはあるし、すんなり問題なくいくほうが珍しいのよね。それに、実はそのほうが怖いのだ」

「ああ、わかります。問題を見過ごしているというか、気付かぬうちに紙一重で回避していて……薬ではありますが、知らぬうちに大きな問題になり、後に大きな障害になったり、改善が難しくなったりしますね。拗れてしまうと本当に難しいと感じます」

凜花は目を瞬いた。

真っ直ぐな気質の麗麗は、問題が立ち塞がったとしても、止まることなく突き進むのではと感じていたからだ。

「なんだか実感が伴った言葉ね。やつぱり、よく練らなくっちゃ」

「はい。私のような立場の者は、主を信じて付いていけばいい。ですが凜花さまのように、上に立つ方は皆を導かねばならない。それはとても大変なことだ……」

「そうね。共有できる道標が必要よね……。でも、道標が多すぎても混乱するし……難しいわね」

はあ。凜花は小さく息を漏らす。

後宮医局には、大きく分けて二つの顔がある。

一つめは、後宮で暮らす者のための医局。身分に隔たりなく医療を受けられる場所

だ。小花園の薬草を使った化粧水や入浴剤などの、現在人気の薬以外の物も扱う。

二つめは、満葉草を使った薬を、国中に広めるための研究をする場所——後宮医局付属研究所とでも呼ぼうか。ゆくゆくは隠し庭の稀少な薬草も、ここで活用方法を研究していかれたらと考えている。

満葉草そのものの。そして、その薬を広めることは、凜花が皇后・望月妃として立つための後ろ盾だ。

凜花の出身地は、皇都から遠い薬草の産地で、元小国の雲蛭州。宮廷に伝手は少なく、なんの権力もない家だ。実は皇家の胡家と、雲蛭州の虞家、それに琥国の琥家は、元は同じ一族だったと判明したが、今はそれを発表するつもりはない。

琥国は王位を巡って騒がしくなる。繋がりは伏せておいたほうがいい。親しくなつた王女や琥珀に対して冷たいようだが、国として対応するならそれが正解だ。

今、凜花が持つ後ろ盾は神託と、皇帝・紫嘩の寵愛だけ。どちらも形のないあやふやなものだ。

そこで満葉草の出番だ。『薬草姫』として、満葉草を使った効果の高い薬を開発し、普及させる。

凜花自身が為したことなら、万が一、神託が取り消されても、紫嘩が他の妃を皇后にしなくてはならなくなっても、凜花の価値は変わらない。

しかも満葉草を使った薬が国中に普及したなら、凜花の後ろ盾は民になる。満葉草の薬で病や怪我を治した者、満葉草の栽培や、売り買いで生計を立てる者……農家、商人、薬師、流通を担う荷馬車や船の主、荷運び人、護衛人、駅や港も賑わうだろう。それがある街にも恩恵が生まれるはずだ。

『民』と一括りに呼ぶと、顔の見えない無力な者にも思えるかもしれない。

だが、個人に焦点を合わせてみれば、決して馬鹿にできない財力や人脈を持つ、月華宮の高官にも負けない者たちだ。

民が味方に付けば、凜花の後ろ盾は最大の勢力になる。

——そして、私の後ろ盾は紫曄の力にもなる。

心の中でつぶやき、しかし……と、凜花は眉根を寄せる。

満葉草を使った薬で利益を上げすぎてはいけない。だが、研究資金はただではない。後宮医局で作る、薬以外のものの売上をあてにするか？

いいや、駄目だ。所詮、後宮内で流通するだけの商品だ。たかが知れている。今のうちに妃が少なくなれば、必要とされる数も減るのだから。

ならば、それらも後宮から出し、外に広く流通させるのはどうだろう？

……いや、これも駄目だ。官が民を圧してはならない。官と民が好敵手となり、互いに高め合い、良い商品を開発していけたらいいのだが……

「理想よねえ……」

はあーと、今度は深い溜息が出た。

「何か迷ってらっしゃいますか？ 凜花さま」

「うん。ちょっと壁にぶつかってしまつて……雲蚩州にいた時とは立場も、やり方も変わるから難しくて。考え方を変えなきゃ駄目かしら」

「確かに、何を優先するかは立場で変わりますね。何を大切にするか。信条はそれぞれですから……」

（信条か。私はなんのために後宮医局を作るの？）

凜花は、ふと、そんなふうに着問した。

後ろ盾を得ること。望月妃になるに相応しい手柄を作ること。後宮医局に付属する意味はいくつもある。だが、出発点は何だったか。

それは、満葉草を誰もが使える薬にすること。目的はそれだ。

「そうよ、麗麗。目的や信条……何を第一に考えるのか、目的は何か。まずはそれを公に掲げましょー」

月と北極星が輝いていれば旅は続けられる。そんな言葉がある。

明るく輝く月は、その加護を願う言葉。そして北極星は、決してぶれることのない道標だ。

「新しい事業は、理念がなければ成功しないわ」
皆の共通目標。なぜこの事業を興すのかという目的。後宮医局は凜花一人でやるものではない。小花園の皆に加え、もっと多くの人間が関わるようになる。

理念を共有しなければ、一丸となって進むことはできない。

「そうですね。目指す方向をはっきり示せば、間違う者も少ないでしょう」

麗麗の言葉に、凜花は頷く。

その通りだ。間違う者は少ないほうがいい。

不正に手を染める者は必ず出てくる。規則を作り、罰則があつたとしても、出来心というものは生まれる。組織が大きくなれば、悪意を持って入り込んでくる者も出てくるだろう。どんなに気を付けていてもだ。

「前途多難ね……ん？」

何か聞こえた気がして、凜花は庭に目を向けた。

遠くに草むしりをする宮女たちの姿が見える。

『――宦官がいなくなるって本当なの？』

『主上がおっしゃったんでしょう？ いついなくなるのかしらね』

『宦官長が罷免されて嫌味な宦官が減つたし、宦官がいなくなつたら、もっと過ごしやすくなるんじゃない？』

凜花の耳に、そんな会話が聞こえてきた。

普通の耳では彼女たちの会話は聞こえないだろう。現に麗麗は、耳を澄ます凜花と、その視線の先を不思議そうに見つめている。

虎の聴^{きこみ}耳はありがたいが、また耳や尻尾が出るんじゃないかと、凜花は内心ヒヤヒヤだ。

「凜花さま。彼女たちが何か……？」

「うん。主上が宦官を廃すと言つたこと、宮女にまで噂が届いているみたい」

「一番低い身分の彼女たちにまで……早いですね」

「裁縫師たちも知っていたのでしょうね」

先日、凜花は紫曄からの文で、『宦官を廃す』と宣言したことを聞いた。

噂はそのうち後宮にも届くと思っていたが、予想よりも早かった。

先程、これが最後の仕事だと言葉に滲ませた裁縫師は、凜花が望月妃になった後、後宮がどうなっているかわからないと、そう思っていたのかもしれない。

後宮を管理している宦官を廃するということは、後宮は必然的に縮小される。

いや、それこそが紫曄の狙いだらう。

(紫曄に聞いた、理想の皇后像も関係しているのでしょうか)

凜花はそれを聞いた時のことを思い出す。

月桃祭の少し後。皇后・望月妃に内定した凜花は、紫暉が求める皇后について、思いついて聞いてみたのだ。

紫暉が語ったのは、後宮を廃し、皇后ただ一人を愛した皇帝の話だった。皇帝と皇后、二人三脚で国政を担う国の話だ。

今は代替わりをしているが、そう古い話ではない。もちろん、その国は今も健在だ。国が続いているということは、後宮がなくとも、国は問題なく運営できた証拠だ。世継ぎにも恵まれたのだろう。

「後宮はどうなるかしら」

「宦官が廃されれば、その仕事は女官が担うしかありませんが……今と同じようには難しいですね。そこまで多くの女官はいませんし」

「そうよねえ」

女官にはすでに他の仕事がある。

女官を増やさない限り、宦官の仕事は宙に浮いてしまう。

——やはり、紫暉は後宮を縮小させるつもりなのだ。

凜花は草むしりをする宮女たちを見つめ、そして寂しそうに微笑んだ裁縫師の顔を思い出す。

「紫暉と話がしたいな……」

後宮を縮小するのなら、余ってしまう女官や宮女をどうするつもりなのか。現在いる宦官たちをどうするのか。紫暉に確認したい。

「お寂しいのですか？ 凜花さま。しばらくお会いできていませんし……あっ！ お

耳が出てしまいそうでしょうか……!?」

麗麗が慌てて凜花の頭を抱き込んだ。

「だ、大丈夫よ、麗麗！ 宦官についての話を聞きたいと思っただけ。まあ……紫暉に会いたいことは会いたいけど……忙しいのよ」

凜花は後宮の責任者である皇后になる。のんきに衣装ができるのを楽しみに、傍観しているわけにはいかない。後宮の皆を守る責任があるのだ。

凜花は草むしりの宮女たちに微笑み、その場を後にした。

自室へ戻ると、大きな包みを抱えた兎杜が、扉の前で待っていた。

「おや、兎杜。お使いですか？」

「麗麗、朔月妃さま。主上のお衣装に使う、輝青絹を受け取りに参りました。それと、こちらを。主上からの御文です」

兎杜は文と言うには簡素な、小さく畳まれた紙を差し出した。

「ありがとう、兎杜」

覚え書きに使うような低品質の紙だ。墨が滲んでいる。こんなところから紫曄の忙しさが窺えてしまう。

「兎杜、忙しいのに待たせてしまい申し訳ない。すぐに輝青絹を持って来ます」

「あ、待ってください、麗麗！」

兎杜が麗麗の袖を引いた。

「あの、少しゆっくりでお願いします。僕、ちよつぱり休憩できたら……なんて」えへへ、と笑う兎杜の顔には疲れが滲んでいた。

よく見れば、まだ子供だというのに目の下に青いくまもある。これはいけない。

凜花と麗麗は、顔を見合わせ頷いた。

麗麗は兎杜をひよいと抱え上げ、凜花が兎杜の包みを引き取った。包みは軽い。どうやらお使いの最後に朔月宮に寄ったよう。これは好都合だ。

「えつ、え、麗麗!? どういうことですか!? 朔月妃さま!」

驚き、脚をじたばたさせる兎杜を無視して、麗麗は扉を開けて凜花の私室へ。

そして兎杜を、榻ふかひすに転がした。

「麗麗? あの……?」

「兎杜。少しここで眠っていきなさい」

「牀しんたいのほうがよかったら使ってもいいのよ? 兎杜」

麗麗は転がした兎杜に上衣うわぎを掛け、凜花が臥室しんしつを勧める。

「えつ、まさか! 朔月妃さまの牀しんたいを使うなんて、主上に知られたら大変です!」

「ふふ。じゃあここで仮眠するといいわ。そうね。私が主上に御文の返事を書く間、待っていてくれる? 兎杜」

責任感の強い兎杜は、こうでも言わないと眠れないだろう。

「あなたは私がのんびり返事を書くものだから、待ちくたびただけ。朔月妃わかしのせいだもの。誰かに帰りが遅いと咎められたら、私の名を出すのよ?」

「……はい。では……お言葉に甘えて少しだけ」

兎杜は小さな声で言う、もぞもぞ上衣をたぐり寄せ、あつという間に眠りに落ちた。

「相当疲れていたのね」

「優秀だと言っても兎杜はまだ子供。このように酷使するのは可哀想です。まったく雪嵐さまたちは何を考えているのか」

麗麗は憤りに呆れを滲ませて言う。

「兎杜の負担が大きいのは、私のせいもあるわ」

「凜花さま……」

後宮医局の件で、直接動いているのは兎杜だ。後宮から出られない凜花の代わりを

務めてくれている。

「後宮の中でできることは、全て私がやりましょう」

後宮医局が欲しいのは凜花だ。

皆のためであり、望月妃になる自分のためでもある。

「兎杜にばかり頑張らせるわけにはいかないわ」

凜花はまだあどけない寝顔を見せる兎杜の頭を撫でる。

「凜花さま？ 立後の儀まで、くれぐれも自重くださいね？」

「ええ。もちろん」

薬の広め方、売り方については神月殿に助言を求めよう。民間の薬師の商売を圧迫しないため、どうするのが適当なのかは明明の実家に聞いてみよう。薬師たちにも話を聞けたらいい。

「さて。ゆっくり返事を書きましょう」

凜花は微笑み、紫曄からの文を開いた。



「それでは凜花さま。おやすみなさいませ」

「おやすみなさい。今日もお疲れ様、麗麗」

麗麗を労い、凜花は牀に入る。

「ふう」

月華宮では、一日があつという間に過ぎていく。やることも、考えることもたくさんありすぎて目まぐるしい毎日だ。

「雲蚩州とは時間の流れが違うみたい……」

凜花は一年前までの暮らしと、帰郷した数ヶ月間を思う。

大好きな薬草の香りに包まれ、毎日畑に出ていた。『虎化しない薬』を求め、実験記録と向き合い試行錯誤した日々も、ここまで忙しなくはなかった。

（紫曄が迎えに来てくれた時は驚いたけど、嬉しかったな……）

凜花は枕元に、そっと手を伸ばす。

紫曄からもらった、短い文を置いておいたのだ。書いてあることは開かなくとも憶えているのに、つい見してしまう。

『三日後の夜、訪ねる』

「ふふっ」

少し粗い文字に笑みが零れる。

きつとお使いに出る兎杜を慌てて引き留めて、手元にあった紙に書いたのだろう。

ほんの一言でも、自ら筆を走らせてくれたことが嬉しい。急いで書いたのだと、ありありとわかる文字が愛おしい。

この短い文は、まぎれもない紫曄の言葉。見つめていると、なんだか紫曄の声が聞こえるようで、凜花の心がふわっと浮き立つ。疲れも吹き飛びそうだ。

「三日後か……」

三日後は、月はまだ丸くない。半月を過ぎたあたりか？

虎になって紫曄の抱き枕になり、寝かしつけることはもうないのに、つい月の満ち欠けが気になってしまう。

以前のように、月の気配で疼くことはなくなったが、心の奥底で、どこか逸るような気持ちを覚えることもある。

雲蚩州で『虎化しない薬』を飲み、虎化を抑えると思われる『解毒の茶』を毎日飲んでいても、凜花の中の虎が消えたわけではないからだろう。

「……………大丈夫、よね？」

凜花は頭に、そろりと手を乗せる。

（よかった、虎の耳は出ていない）

はーっと大きな安堵の溜息が出た。あまり楽しみにしすぎると、また虎の耳と尻尾が出るのではと不安なのだ。

月桃祭を終えてしばらくした頃。ちょうど今と同じく紫曄の訪れを楽しみにしていたら、ひょっこり耳と尻尾が出た。月華宮に戻ってきてから、耳と尻尾が出たのはその時だけだが、実はその後も、出そうだなと感じたことはあった。

虎化には気持ちが影響すると、凜花はよく知っている。

虎化する時は、月を見つめて虎化を願う。願わなければ変化はしない。

通常、子供は子虎に、大人は立派な大人の虎に変化する。

だが、虎化を受け入れきれなかった凜花は、大人になっても子虎のままだった。凜花の虎化を願う力……気持ちが弱かったからだろう。

だから虎としては弱い、子虎にしかかななかったのだらうと、今になってそう思う。意思の力、気持ち。

月の女神はなんとあやふやなものを、虎化の引き金にしたのか。

ごろり。凜花は寝返りを打ち、差し込む月明かりに気が付いた。夜空に浮かぶ半月が、窓越しにこちらを覗いている。

月の女神は夫の心遣いで桃を授かり、神仙しんせんに戻ることができた。そして一人、月から地上の夫を思い、夫は地上から月を見上げ妻を思う。尊い夫婦愛だ。

（だから月の女神から授かった虎化の能力は、気持ち……思いに左右されるのかな）

凜花はぼんやり思う。